

## 屋代本平家物語の「き」「けり」のテキスト機能

——覚一本との比較——

藤 井 俊 博

### 一 「き」「けり」の機能と平家物語の文章

筆者はこれまで、院政鎌倉期の説話作品に用いられた「けり」について検討し、阪倉篤義（一九五六）が指摘した枠づけ機能が様々な作品に見られ、説話の文章構成において重要な働きを持っていることを検討してきた。説話においては、単純に「けり」を冒頭や事件の終局部で用いる場合もあるが、時代を追って「なむける」「ぞける」などの係り結びによって文章が纏める様式が一般化することを指摘した。さらに長編物語として軍記物語の『覚一本平家物語』（以下、覚一本）を取り上げ、係り結びによる様々な文末形式が内容を締め括る機能を持っていることを指摘した。覚一本においては、各章段を小さな物語として纏まりを持つと考え、「けり」の諸形式が各章段の末尾や段落末尾に用いられて内容を締め括る機

能を持っていることを見出した。覚一本では、係り結びによる「ぞける」が章段や段落の内容を締め括る枠づけ表現として最も多く用いられること、「こそけれ」やさらに強調的な「こそ〜にけれ」「こそ〜てんげれ」などの強調的、詠嘆的な枠づけ表現があること、さらに、「ぞし」が作品全体の大枠として用いられていることなど、多様な形式が覚一本の文章構造と関わることを指摘した。<sup>①</sup>

本稿では、これらを受けて、『屋代本平家物語』（以下、屋代本、使用テキストは麻原美子・春田宣・松尾葦江編『屋代本高野本対照平家物語』（新典社））を取り上げる。屋代本は覚一本と同じ語り本系統の一つであるが、語り本の完成形態とされる覚一本との関係は、いまだ不明な点が多い。琵琶語りの正本である覚一本に対し、屋代本には古態性が指摘されていたが、近年では屋代本の本文の持つ後次性や独自の指向性も指摘され、その要因について延慶本などの説

み本との関係も視野に入れた検討がなされている。<sup>②</sup>

屋代本は巻四・巻九を欠くこともあり、その総文数の四二九八文（劔巻を除く。以下同じ）は、覚一本（岩波日本古典文学大系の龍谷大学図書館蔵本による数）の五八三四文の74%の分量にとどまる。また、屋代本には一七〇の章段が存在しているが、使用テキストによつて、その内容に対応する高野本の章段数を数えようと、一四九段に過ぎない。これは、覚一本（龍谷大学図書館蔵本や高野本）の章段は内容によつて大きく纏められているが、屋代本では編年体をとつており章段分けが細かくなっているためである。このような性質の違いから、覚一本と屋代本の文章構造に関わる相違点も見られる。すなわち、覚一本が内容の関わる記事をなるべく一カ所に集結させて、記事同士の関連づけを強めようとする傾向があるのに対して、屋代本は編年体により記事を並列的に配列している。そのため各章段には内容的な独立性が見られ、また本文の叙述は簡略で装飾性に乏しいとも評される。<sup>③</sup>

このような文章の性質の相違点から、屋代本では章段毎の叙述のまとめ方にも覚一本とは異なる点があると予測される。覚一本に見られた枠づけの基本となる表現形式である「ぞ〜ける」や、「き」による大きな枠づけ表現はどのような様相を見せるであろうか。本稿では、これらの問題について、覚一本において特徴が見出しされ

た「ぞ〜ける」「こそ〜けれ」「ぞ〜し」などの表現が、屋代本においてどのように現れているかを中心に検証していくことにしたい。

## 二 「き」「けり」の概観

本節では、始発部分と終結部分における使用傾向を概観しておく。覚一本と比較するため、覚一本を分析した拙稿（二〇一五）で用いた分析方法を踏襲する。屋代本の各章段が内容上一定の纏まりを持っているものと考え、各章段の始発部分や終結部分の文末表現を見ていく方法である。具体的には、章段内部の特定の位置に現れた文末表現に注目していく。すなわち、章段冒頭文と章段末尾文の文末表現、および、『屋代本高野本対照平家物語』の設定する章段内部の形式段落の段落冒頭文と段落末尾文を調査する。また、章段の最終段落についてその章段の最終動作を叙述した文を「終局部」として調査する。さらに「終局部」の後に続く、話末評語に相当する解説・批評の文も評語部として調査する（章段末尾文を除く）。これらに入らない展開部分の文末における様相も参考に示す。これによつて、「章段冒頭」と「段落冒頭」を「始発部分」とし、「段落末尾」「終局部」「章段末尾」を「終結部分」として調査し、その他に「評語部」「展開部」に分けて、傾向を分析する。これらの中で、とりわけ「終局部」や「章段末尾」の例が終結機能をに

(表一) 章段の各箇所例数

	章段冒頭	段落冒頭	小計	段落末尾	終局部	章段末尾	小計	評語	展開部	総計		
用言・終止形	動詞	76	139	215	69	3	25	97	32	945	1,289	
	～なし	0	6	6	8	0	1	9	9	77	101	
	形容詞	2	1	3	0	0	1	1	2	14	20	
	～がたし	0	0	0	2	0	0	2	1	9	12	
	形容動詞	0	4	4	6	0	3	9	2	18	33	
用言・係結	ぞ～動詞連体	0	2	2	6	2	3	11	1	14	28	
	ぞ～なき	0	2	2	3	0	0	3	1	10	16	
	ぞ～形容詞連体	0	2	2	1	0	2	3	2	14	21	
	ぞ～形動連体	0	1	1	0	0	2	2	2	4	9	
	こそ～形容詞已然	1	3	4	7	0	11	17	7	17	45	
	こそ～形動已然	0	0	0	2	0	3	5	1	8	14	
	こそ～動詞已然	0	1	1	0	0	1	1	0	2	4	
助動詞・終止形	けり	13	38	51	30	8	14	52	16	233	352	
	ず	9	10	19	8	0	9	17	12	163	211	
	なり	4	20	24	24	0	7	31	13	168	236	
	たり	5	13	18	9	0	2	11	4	116	149	
	ぬ	5	8	13	3	0	3	6	6	63	88	
	り	6	5	11	2	0	5	7	5	67	90	
	たりけり	0	4	4	2	0	0	2	1	11	18	
	にけり	2	6	8	3	5	9	17	0	30	55	
	かりけり	3	4	7	5	0	7	12	3	41	63	
	ざりけり	0	3	3	3	0	0	3	0	17	23	
	てんげり／てけり	1	1	2	4	2	0	6	0	19	27	
	ごとし	0	2	2	0	0	0	0	2	20	24	
	き	1	3	4	0	0	0	0	0	10	14	
	けむ	0	1	1	5	0	1	6	0	6	13	
	にき	0	0	0	0	1	0	1	0	1	2	
	かりき	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	
	べし	0	0	0	3	0	0	3	2	13	18	
	つ	0	0	0	0	0	0	0	0	5	5	
	助動詞・係結	ぞ～ける	20	64	84	86	33	33	152	9	498	743
		ぞ～たりける	1	4	5	7	1	6	14	0	55	74
ぞ～し		2	1	3	5	4	5	14	3	36	56	
ぞ～たる		1	6	7	7	4	3	14	1	45	67	
ぞ～かりける		1	1	2	1	0	0	1	0	4	7	
ぞ～にける		1	2	3	6	6	1	13	0	20	36	
ぞ～なる		0	1	1	0	0	2	2	2	4	9	
こそ～けれ		1	8	9	11	2	2	16	5	33	63	
こそ～たれ		1	0	1	0	0	0	0	0	4	5	
こそ～たりけれ		0	0	0	0	0	0	0	0	4	4	
こそ～けめ		0	0	0	1	0	0	1	0	3	4	
こそ～てんげれ		0	0	0	2	0	1	3	0	0	3	
こそ～にけれ		0	0	0	0	0	1	1	0	3	4	
こそ～しか	0	0	0	1	0	0	1	1	0	2		
他	けるとかや	0	0	0	2	3	2	7	0	6	13	
	ける連体形終止	0	2	2	0	0	0	0	0	9	11	

(表二) 用言の比較

	始発部分	終結部分
動詞・終止	215	97
ぞく動詞・連体	2	11
なし	6	9
ぞくなき	2	3
形容・終止	3	1
ぞく形容・連体	2	3
こそく形容・已然	4	17
形容動詞終止	4	9
ぞく形動・連体	1	2
こそく形動・已然	0	5

う表現として注目されるものである。

屋代本の総文数四二九八文（劔巻を除く）を対象として調査し、

(表二)に用例数が2例以上ある文末表現を分類して示した(ただし、和歌で終わる場合の文末は対象から除く)。大きくは用言の終止形用法と係り結び用法、助動詞の終止形用法と係り結び用法に分けて示した。なお、文末表現の区分は、覚一本に見られるが屋代本に用例の見られない「たりけり」「ぞくてんげる」「こそくかりけれ」を削除し、「ぞくにける」を「ぞくける」から区分して加えた

こと以外は、前稿と同様である。また、動詞終止形には「る・らる」の終止形の場合を含めている<sup>①</sup>。

次に、(表一)に基づきながら、次に用言と助動詞に分け、各々、終止形用法と「ぞ」「こそ」の係り結びに用いられる表現形式について、始発部分と終結部分の傾向を確認しておく。

(表二)は、用言の終止形と係り結びの用例について抜き出し、始発部分と終結部分の総数を対比して示したものである。これよると、動詞の場合は終止形が始発部分に用いられやすく、係り結びは終結部分に用いられやすい傾向が窺える。一方、「なし」「形容詞」「形容動詞」の場合、係り結びが終結部分で用例が多い傾向は見られるものの、終止形においてもある程度の用例が見られ、特に「なし」「形容動詞」の終止形では終結部分の数が始発部分の例数を上回っている点に注意される。このような傾向は覚一本でも、「形容動詞」終止形に見られたが、「なし」の場合には見られなかった傾向である。屋代本で多いのは、次のような、「なし」を含む熟語的な表現による評価表現や、「形容動詞」による慣用的表現で内容が変わる例であり、終結機能が強く現れる表現を作っている。

(1)然ニ其恩ヲ忘テ、此一門ヲ可滅之由、無外人所ニサルヘキ者其語ライテ、共宮ノ外ハ他事モナシ。

(一・新大納言成親卿以下謀叛事)

(2) 兵衛佐バカウソ目出坐スルニ、木曾ハ、都ノ守護シテ有ケルカ、貌ハ吉男ニテ有ケレトモ、立居ノ振舞、物云タル詞ハ連陋ナル事無限。  
(八・木曾義仲於洛中振舞事)

(3) 「楽尽テ悲来」ト書タル江相公ノ筆ノ跡、被恩知テ哀ナリ。

(二・重盛卿父禪門諷諫事)

(4) 行幸ノ儀式有様、浅猿ナントモ愚カナリ。

(八・法住寺殿合 戦事)

特に「くテ哀ナリ」の定型表現は9例があり、段落末に4例、章段末尾に2例が見られる。

(表三)は、助動詞の主要な形式について同様の方法でまとめたものである。これによると、「けり」「たり」「き」などの終止形が始発部分に用いられやすいのに対して、対応する係り結び形式の「ぞくける」「ぞくたる」「ぞくにける」「こそくてんげれ」「ぞくし」「こそくしか」などは終結部分に用いられやすいことがわかる。しかし、終止形でも「にけり」「てけり」「にき」など「に」を伴う場合は終結機能が認められる。これらの傾向は、拙稿(二〇一五)で見た覚一本において「ぞくたる」のみは始発部分に例が多く傾向が異なっているが、その他は同様の傾向である。(表一)によると係り結びの「ぞくたりける」も始発部分5例に対して終結部分14例と多く、「ぞくたる」とともに終結機能が強く見られる。

総じて、「けり」「き」「たり」は、終止形では始発部分の例が多いが、係り結びでは終結部分の例が多くなる。さらに終止形で終結部分の例が多い「にけり」「てけり」になると、係り結びを組み合わせた場合にはさらに終結部分への傾斜が大きいと言い得よう。これらの大きな傾向は、章段の構成方法が異なる覚一本と比べても変わらない点である。

(表三) 助動詞の比較

けり	51	始発部分	52	終結部分
ぞくける	84		152	
たり	18		11	
ぞくたる	7		14	
にけり	8		17	
ぞくにける	3		13	
こそくにけれ	0		1	
てけり	2		6	
こそくてんげれ	0		3	
き	4		0	
にき	0		1	
ぞくし	3		14	
こそくしか	0		1	

三 終結機能の諸相

以下、屋代本の始発機能と終結機能を担う表現を覚一本と比較しながら傾向を述べておく。

三一― 終止形の機能——「にけり」「にき」「てけり」「かりけり」等——

(表一)によると、終止形の助動詞の中で、「にけり」「てけり」「かりけり」のような複合形式、「なり」「けむ」「べし」などの主観性を持つ助動詞は終結部分に多く傾斜して用いられる。その他、1例のみ終結部分に多い「けり」や始発部分と終結部分が同数の「ざりけり」も、終結機能に関わる表現と思われる。

「けり」の場合は、始発部分51例に対し終結部分52例で1例のみながら逆転している。一方、覚一本の「けり」では始発部分74例、終結部分56例で、他の助動詞と同じく始発部分の例が上回っている。細かく見ると、覚一本の終局部8例、章段末尾8例に対し、屋代本では終局部8例、章段末尾14例で、特に章段末尾の例が上回っている。卷一二の物語最末尾でも「其ヨリシテ平家ノ子孫ハ絶ケリ。」(二二・六代御前于時三位禪師被誅之後平家一門跡絶事)で終えており、覚一本が「それよりしてこそ平家の子孫はながくたえにけり」と強調的であるのに比べて物語全体を語り終わる表現としては平板というべきであろう。屋代本の章段分けは覚一本より細かく、編年体的な構成を取っているため必ずしも内容上の大きな切れ目ではない部分が章段末尾になる場合も多い(屋代本の章段末尾14例中の7例は、覚一本の対応箇所では章段の展開部に位置する)。このことを踏まえると、屋代本の「けり」は、終結機能を本格的に担う表現というわけではなく、平板な叙述で章段を終える表現傾向を示していると推測される。

「ざりけり」と形容詞カリ活用に続く「かりけり」のようなラ変につづく「けり」には、内容を詠嘆的に締め括る場合がある。

(5) 有王ハ是ヲ聞ニ付テモイト、心憂シ。山ノ方カ覚東ナク覚ケル間、遙ニ奥ヘ尋入り、峯ニ上リ谷ヘ下レ共、白雲跡ヲ埋ミテ往來ノ道モサタカナラス。青嵐夢ヲ破テ、真面像モ見サリケリ。

(段落末尾)

(三三・有王丸鬼海島尋渡事并俊寛死去事)

(6) 「当座ノ恥辱ヲ為レ遁レンカ帯刀之由露スト云ヘトモ、後日之訴訟ヲ存知シテ、帯木刀ヲケル用意ノ程コソ神妙ナレ。携弓箭二者ノ計事ハ、自元合コソアラマホシケレ。兼又郎従主ノ恥ヲス、カント思テ潜ニ参候之条、且ハ武士之郎等ノ習ナリ。忠盛カ科ニ非ス」ト還テ預叡感ニ上ハ、敢テ罪科之沙汰モ無リケリ。

(章段末尾)

(二一・忠盛昇殿事)

「なり」「けむ」「べし」などは、語り手の批評を差し挟んで段落などを閉じる場合である。

(7) 伝教大師当山草創ノ昔、阿耨多羅三藐三菩提ノ仏達ニ折申サセ給ケム事ヲ思出テ読タリケルニヤ、イトヤサシウソ聞ケル(終局部)。八日ハ葉師ノ日ナレトモ、南無ト唱ル声モセス、卯月ハ垂跡ノ月ナレトモ、捧幣帛人モナシ(評語部)。明玉垣神サヒテ、注連繩ノミヤ残ケム(章段末尾)。

(三・山門 学匠堂衆不快事)

(8) 「果報コソ目出クテ大臣ノ大将ニ至ラス。容儀体拜人ニ勝レ、才智覚サヘ世ニ越ヘシヤ」トソ、時ノ人ハ被感ケル(終局部)。国ニ諫ムル臣アレハ其国必ヤスク、家ニカラカフ子アレハ其家必タ、シトモ、加様ノ事ヲヤ申ヘキ(章段末尾)。

(二・重盛卿父禪門諷誦事)

終止形「にけり」は終結部分に多く、(表三)のように係り結びの「ぞくにける」を上回る例が見られる。特に章段末尾で9例が見られ、覚一本での同7例よりも多い。「にけり」は、章段の冒頭にも末尾にも用いられる。これは、次のように時間や空間の経過を表すのに多く用いられるためである。広くいえば事態の推移に関わる表現を作っていると見えよう。

(9) サル程二八月十日アマリニモ成ニケリ。(章段冒頭)

屋代本平家物語の「き」「けり」のテキスト機能

(三・小督局事)  
(10) 松坂、四宮河原ト思ヘ共、関山ヲモ打越テ、大津浦ニモ成ニケリ。(章段冒頭)  
(一一・六代御前高尾文学請取事)

(11) サル程二歳暮テ、治承モ二年ニ成ニケリ。(章段末尾)

(二・彗星事)

(12) サル程二歳去年来テ、治承モ四年ニ成ニケリ。(章段末尾)

(三・明雲大僧正天台座主還着事)

「にけり」が典型的な終結機能を示すのは、次のような終局部の例である。物語や説話に多い慣用句「やみにけり」は覚一本には用いられていないが、屋代本では(14)のように一例用いている。

(13) 様々ノ御願ヲ立、ヲコタリヲ申サセ給シカトモ、御平癒無リシ

カバ、御母北ノ政所、是ヲ御歎キアテ祈申サセ給シカバ、暫シバ御平懸ト聞ヘサセ給シカ、遂ニ永長二年六月廿六日、御病垂ラセ給テ、同廿八日、御年三十八ト申ニ薨御成ニケリ。(一・後二条関白薨御事)

(14) 「此法師ヲ可行死罪歟、又流罪カ」ト沙汰有シカトモ、大小事ノ忽劇ニ打紛テ止ニケリ。(六・平家諸方祈禱不成就事)

「てけり」も終結部分に多いが、「にけり」に多く見られる章段末尾の例は一例も見られない。討死等の場面を強調的に描いて段落を閉じる例が中心で、終局部にも1例用いられている。

(15) 同七日、煙ト成奉テ、骨ヲハ円美法眼頸ニ懸テ、福原ニ下テ納  
 テンケリ。(終局部) (一六・入道相国疾患事同被薨事)

(16) 次日、北条五百騎ニテ幡差セ、赤井河原ニ行向テ、ソコテ十郎  
 藏人ノ頸ヲハ終ニ切テケリ。(段落末尾)

(一一・三郎先生義憲十郎藏人行家被誅事)

「にき」も、展開部以外では終局部にのみに用いており、終結機  
 能が顕著である。「にき」は漢文訓読文体の枠づけ表現であり、屋  
 代本の「燕太子丹謀叛事付感陽宮事」の終局部に見られる。章段全  
 体の文末の表現を抜き出すと次のようである。

ゾ〜ケル↓ゾ〜ケル↓ゾ〜ケル↓動(終) ↓動(終) ↓コソ〜  
 ケレ↓ズ↓動(終) ↓動(終) ↓ゾ〜ケル↓コソ〜ニケレ↓動  
 (終) ↓タリ↓ル・ラル↓動詞終止形↓ゾ〜ケル↓動(終) ↓  
 タリ↓ゾ〜ケル↓動(終) ↓ケリ↓動(終) ↓動(終) ↓動  
 (終) ↓ケリ↓ゾ〜タリケル↓動(終) ↓ゾ〜ケル↓ナリ↓ナ  
 リ↓リ↓ケリ↓ゾ〜ケル↓動(終) ↓ズ↓ヌ↓動(終) ↓動  
 (終) ↓タリ↓ゾ〜ケル↓動(終) ↓動(終) ↓動(終) ↓ナ  
 リ↓ヌ↓ル・ラル↓動(終) ↓ズ↓ゾ〜ケル↓動(終) ↓タリ  
 ↓ゾ〜タリケル↓動(終) ↓コソ〜ケレ↓ヌ↓ル・ラル↓  
 キ↓コソ〜シカ↓カリケリ

次に章段の末尾部分を引用しておく。

(17) ……王ハ是ヲ聞知テ、袖ヲフツト引キリ、七尺ノ屏風ヲ踊越テ、  
 銅ノ柱之陰ニソ逃隠給ケル。荆軻イカテ劍ヲ投懸奉ル。折節番  
 ノ医師ノ御前ニ候ケルカ、葉ノ袋ヲ劍ニムズト投合セタリ。劍  
 葉ノ袋ヲ被懸ナカラ、口六尺ノ銅柱ヲ半マテソ切タリケル。荆  
 軻劍ヲ二モタネハ、ツ、イテナケス。王立帰テ、我劍ヲ召寄テ、  
 荆軻ヲ八割ニコソセラレケレ。秦舞陽モ切レヌ。廳軍兵ヲ遣テ  
 燕丹ヲモ被亡。秦始皇ハ遁テ、燕丹遂ニ滅ニキ。「恩ヲ忘レ契  
 ヲ変スル者ハ、昔モカウコソ有シカ。サレハ今ノ頼朝モサコソ  
 アランスラメ」ト色代スル人モ多カリケリ。

この章段は、「異国ニ昔ノ先縦ヲ尋レハ、燕太子丹、秦ノ始皇ニト  
 ラバレテ誠ヲ家事十二年、燕丹涙ヲ流シ、『我本国ニ老母有。暫ノ  
 イトマヲ給テ彼ヲ見』トソ申ケル。」で始まり、「けり」「ぞ〜ける」  
 を基調とした文末表現で進められる。「こそ〜けれ」「こそ〜にけ  
 れ」で大きな纏まりを付けながら、終局部に「にき」を用い話を終  
 え、それに続く評語部に「コソ有シカ」を用いている。最末尾の  
 「多かりけり」では、「にき」「しか」で終結した説話内容から平家  
 物語本来の筋に戻り、「かりけり」を用いて章段を終結させている  
 構造である。



三―二「ぞ」の係り結び——「ぞける」「ぞたりける」「ぞまにける」

係り結びの表現は多く終結部分に用いられる。叙述の基本となっている係り結びの「ぞける」は屋代本でも終結部分に多いことが認められるが、覚一本に比べるとその割合は少ない。すなわち、覚一本の始発部分79例、終結部分189例と比べて、屋代本の始発部分84例、終結部分152例で、総数は同じ743例であるから、覚一本の方がより終結部分に偏っていることがわかる。用例は展開部に最も多いので、展開部における使用比率を終止形「けり」と比較すると、(表一)によれば屋代本の展開部では、終止形の「けり」233例に対して「ぞける」498例と倍以上見られる。覚一本の展開部では「けり」312例、「ぞける」455例であるから、屋代本では展開部に多く係り結びが用いられていることがわかる。このことから、覚一本に比べ屋代本では「ぞける」の終結機能を担う面は弱いと言えよう。

一方、「に」を伴う「ぞにける」の形になると強い終結機能が現れる点は、覚一本と同様の傾向が見られる。次に示すように、屋代本では、特に終局部ではこの形は覚一本より例数が多い。

《覚一本》章段冒頭0 段落冒頭3 段落末尾10 終局部3  
章段末尾3 評語0 展開部26  
《屋代本》章段冒頭1 段落冒頭2 段落末尾5 終局部6

屋代本平家物語の「き」「けり」のテキスト機能

章段末尾1 評語1 展開部21

また、屋代本の終止形「にけり」との比較でも、(表二)によれば、章段末尾では少ないものの、段落末尾や終局部では終止形の「にけり」より多く、「ぞにける」の終結機能の強さが窺える。次に、屋代本で例数の多い終局部の例を挙げておく。

(18) 大衆是ヲミテ、ヒハルニ不及、涙ヲ流シ、尤モくト同シテ、  
谷々ヘクタリ坊々ニソ入ニケル。

(一) 平大納言時忠山門勅 使事  
(19) 臆テ出家シテ、打伏事十余日有テ、遂ニ思死ニソ死ニケル。

(七) 長井齊藤別当真盛錦直垂事  
(20) 平家ハ、日数フレハ、都ヲハ山河ノ程ニ隔テ、雲居ノヨソニソ  
成ニケル。  
(七) 平家一門落都趣西国事

(21) 既ニ此京ハ、無主里トソ成ニケル。

(八) 法皇自鞍馬寺山門 御幸事

三―三「こそ」の係り結び——「こそけれ」「こそ形容詞已然形」  
然形・形容動詞已然形

「こそ」による係り結びは、「ぞ」よりもより主観的・強調的な語感を持つ。例の多い「こそけれ」の形式は、覚一本では101例、屋代本では63例が見られる。「ぞける」の例数がたまたま両本とも

743例であるのを基準に見ると、屋代本の「こそ〜けれ」の使用比率はかなり低いことがわかる。これは屋代本は主観的・強調的な叙述が少ないことを示すと思われる。

「こそ〜けれ」は、次のように、評語部に多く見られる。

(22) 経ノ島ト申ハ、石面ニ一切経ヲ書テ被築タリケル故ニコソ、経ノ島トハ申ケレ。 (六・入道相国疾患事同被薨事)

(23) 天性此僧正ハ情深キ人ニテ、或時郭公ノ蹄ヲ聞テ、聞タヒニメツラシケレハ時鳥イツモ初音ノコ、チコソスレト読レタリケルニヨテコソ、初音僧正トモイハレ給ケレ。 (六・興福寺 別当花林院僧正逝去事)

終結部分で、語り手による詠嘆的表現で締め括る例が見られる。

(24) 矢種射尽シテ、打物抜テ戦ヒケルカ、矢七八射立ラレテ、立死ニコソ死ケレ。 (七・砺波山黒坂志保坂篠原等合戦事)

(25) 又或者カ申ケルハ、「……大政殿ワルヒレ給フモ理也」ト申テコソ、恥ヲハ少シ助ケケレ。(二二・宗盛清宗父子関東下向事)  
「にけり」の強調形式である「こそ〜にけれ」でも、章段末尾を強調的に締め括る例が1例見られる。

(26) 平家ハ新中納言知盛一万余騎、千余艘ノ舟ニ乗、播磨国へ押渡テ、室山ニ陣ヲ取ル。十郎藏人聞之、平家ト軍シテ木曾ニ中直リセントヤ思ケム、二千余騎ニテ室山ニ推寄テ一日戦暮ス。サ

レトモ平家ハ多勢、御方ハ無勢ナリケレハ、散々ニ打散サレテ引退ク。播磨ヲハ平家ニ恐レ、都ヲハ木曾ニ恐テ、船ニ乗り和泉国へ推渡テ、河内国長野城ニソ籠ケル。平家ハ室山ノ軍ニ勝テコソ、弥大勢付ニケレ。 (八・播磨国室山合戦事)

このような強調的・詠嘆的用法は、形容詞や形容動詞の結びの場合に通じるものであろう。二節では「形容動詞終止形」に終結機能がある場合に「〜テ哀ナリ」のような慣用表現が用いられることを述べたが、これを係り結びで強調した表現が「こそ〜哀れなれ」であり、より強調的な終結機能の表現である。屋代本では9例が見られ、次のように章段末尾にも3例が見られる。

(27) 我国ハ粟散辺地境、濁世末代トハ云ナカラ、澄憲是ヲ付属シテ、法衣ノ袂ヲ押ヘツ、被返ケルコソ哀ナレ。 (二一・先座主明雲罪科儀定事同配流事)

(28) 然ニ此君達、無程実ノ墨染ノ色ニナラレケルコソ哀ナレ。 (三三・小松内府熊野参詣事)

(29) 朝ニ替リタニ変スル世間ノ不定コソ哀ナレ。 (二二・北条四郎時政上洛事)

屋代本の「こそ」による強調形式は、例数は少なくとも終結機能を担う表現の一つとして指摘できるものである。

三―四 「き」の機能——「ぞし」の機能——

「き」系統では、終止形の「き」が始発部分のみに用いられるのに対して、「ぞし」はほとんど終結部分に偏っている。屋代本に措いても、「ぞし」「にき」は「ぞける」「にけり」と同様に、終結機能を担っていることがわかる。

(表一)によると屋代本においても覚一本と同様に、「ぞし」は終結部分に偏って用いられ、終結機能が窺える。しかし、一方で大きな相違点も見られる。覚一本の「ぞし」は121例であるのに対し、屋代本の「ぞし」は56例であり覚一本の半分程度しか例が見られない点である。また展開部の例数と比べても、覚一本では終結部分49例に対し展開部55例と差が少ないのに対して、屋代本では終結部分14例に対し展開部36例と、終結部分での使用がかなり少ない。さらには、「一・新大納言成親卿以下謀叛事」「二・重盛卿父禪門諷諫事」「三・中宮御産事」などでは「ぞし」が近い位置で続けて用いられる例も見られる。これらのことから考えると、「ぞし」は、覚一本のように内容を大きく纏める機能は弱いと思われる、語り手による解説内容をあたかも当時の人々の風聞のような形で挿入する表現に止まる場合が多い。

(30) 中宮御産ノ時、御局ヲ進セラル、事ハ、寛弘二上東門院御産ノ時、御堂殿ノ御局ヲ進セラレタリシ其例トソ聞ヘシ。

屋代本平家物語の「き」「けり」のテキスト機能

(三・中宮御産事)  
(31) 花山院前大政大臣忠雅、大宮大納言隆季、此人々ハ後日ニ布衣著シテ、大政入道宿所へ被向ケルトソ聞ヘシ。

(30)は段落途中の例、(31)は段落末尾の例である。(30)のような先例の解説をする例は、次の(32)のように段落末尾にも見える。

(32) 諒闇ニ賊首ヲ渡サル、事ハ、堀河天皇崩御ノ時、前対馬守源義親カ首ヲ被渡タリシ典例トソ聞ヘシ。

(六・木曾冠者義仲於北国謀叛事)  
次の例は、評語部で連続使用した例であるが、登場人物(大臣殿)に共感した叙述の例である。

(33) 古ニシ緋玉垣、二度カサルトソ見シ。七日参籠ノ明方ニ、大臣殿御為ニ、御夢想ノ告アリ、御宝殿ノ御戸ヲ押開キ、ユ、シクケタカキ御声ニテソ聞ヘシ。世ノ中ノウサニハ神モナキ物ヲ心ツクシニ何祈ル覽。大臣殿打驚キ、胸打騒ギ、何ニスヘキトモ不覚給。

(八・平家豊前国宇佐官参詣事)  
「き」による係り結びでは、動詞が「聞く」「見る」に偏るのは覚一本と同じであり、拙稿(二〇一五)で論じたように、これにより登場人物や当時の人々と共感する表現を作っていると思われる<sup>5)</sup>。屋代本では他に、「とぞ覚えし」3例も見られる。覚一本では「とぞ聞

こえし」91例「とぞ見えし」21例で「とぞ聞こえし」に偏るが、屋代本では、「とぞ聞こえし」27例「とぞ見えし」25例と差が少なく、「とぞ聞こえし」が強いテキスト機能を持つている覚一本とは異なる傾向が見られる。

文章機能の面では、覚一本では、特に終結機能が強い表現である連体形終止の「ける」を伴う「けるとぞ聞こえし」が34例も見られるが、屋代本では9例に止まる。もつとも屋代本の9例の中の6例が終結機能（3例は章段末尾）の例であるから、この形式には強い終結機能が窺えるのであるが、全体では少数に止まるのである。この点は作品全体の文章構成の方法にも関わり、覚一本では冒頭の祇園精舎で「しか」を用い、灌頂巻の最末尾を「とぞ聞こえし」で作品を纏めており、作品全体を「し」「しか」によって統括している文章構造であると考えられたが、屋代本では冒頭章段で「民間ノ憂ウル処モ不知シカハ」「皆ナ取々ニコソ有シカドモ」のように「シカ」を用いるものの、巻二の末尾は「平家ノ子孫ハ絶終ケリ」と「けり」で終わっており、首尾対応しない。屋代本では語り手の立場から「き」「し」「しか」で物語全体を統括しようという意図は見られず、冒頭章段や解説的部分で語り手の視点を表す「し」「しか」が用いられるに止まるのである。

これらの点を総合するに、覚一本では「（ける）とぞ聞こえし」

を章段や物語の枠として意図的に用いていたが、屋代本においてはこれを枠づけ表現とする意識は乏しいと考えられる。「けるとぞ聞こえし」は、屋代本では風聞を示す表現や批評的に挿入するに止まっている場合がほとんどであり、話末評語と違いがない。逆に言えば、この表現を作品全体を支える表現機構として利用したのは覚一本の特質であると言えるであろう。<sup>6)</sup>

#### 四 まとめ

以上、屋代本の傾向について検討した。章段構成が食い違う場合が多いにもかかわらず、大きな傾向としては共通点が見られた。終止形の「にけり」や、係り結びの「ぞける」「ぞける」「こそすけり」「こそすけり」などの表現に終結機能が見られる点などである。

一方、終結部分の「ぞける」「こそすけり」「ぞし」の例は覚一本に比べての使用比率が少なく、終止形「けり」の使用比率が多い傾向も窺えた。屋代本において特徴的であるのは、終結部分でも終止形の「にけり」が多い点であり、覚一本に見られない「やみにけり」も用いていた。このように「けり」「にけり」を終結部分に多く用いるのは院政期の説話と近く、鎌倉期の説話や覚一本のような係り結びによる強調的・詠嘆的表現が多いのとやや異なる傾向で

ある。また、覚一本と同じく「けるとぞ聞こえし」の形式に強い終結機能が窺えるものの、用例は少なく、覚一本のように物語の大枠を作る面は見られなかった。

このように、章段の構成が意識された覚一本においては終結機能の表現も様々に工夫されているが、屋代本では章段や段落をまとめる表現には平板な面が見られた。これは屋代本が編年体をとるため終結部分で強調してまとめる表現がとられにくいためと推測できる。屋代本は読み本の延慶本などの共通点も指摘されている。読み本系統における使用傾向をさらに見ていく必要がある。

#### 注

- ① 拙稿(二〇一〇)(二〇一一)(二〇一二)(二〇一三a)(二〇一三b)(二〇一四a)(二〇一四b)(二〇一五)を参照。
- ② 屋代本の後次性や指向性については、千明守(二〇一三)を参照。
- ③ 『平家物語大事典』(東京書籍)の「覚一本平家物語」(志立正知執筆)を参照。
- ④ 動詞終止形には「る・らる」を含めている。これを分けて示すと次のようであり、これを除いた動詞終止形比較しても、始発部分に多く偏り同じ分布傾向であることがわかる。助動詞としては「る・らる」は始発部分に現れやすい助動詞とも見ることができ、章段冒頭(11)段落冒頭(16)段落末尾(14)終局部(2)章段末尾(5)評語部(6)展開部(104)を参照。
- ⑤ 拙稿(二〇一五)を参照。

屋代本平家物語の「き」「けり」のテキスト機能

⑥ 前掲の「燕大子丹謀叛事付感陽官事」にもあるように、漢文説話の内容を受ける評語部に「こそしか」が見られる。屋代本において「き」の使用は、事実な記述に重きを置く場合に用いられると言えよう。

#### 参考文献

- 阪倉篤義(一九五六)『竹取物語』の構成と文章(『国語国文』昭和三一一年一月号、『文章と表現』(一九七五)角川書店に所収)  
千明守(二〇一三)『平家物語屋代本とその周辺』(おうふう)  
藤井俊博(二〇一〇)『今昔物語集の「けり」のテキスト機能——冒頭段落における文体的変異について——』(『古典語研究の焦点』武蔵野書院)  
藤井俊博(二〇一一)『今昔物語集の「けり」のテキスト機能(統)——終結機能を中心に——』(『国語国文』80-10)  
藤井俊博(二〇一二)『宇治拾遺物語の「けり」のテキスト機能——今昔物語集——古事談との比較——』(『同志社国文学』76)  
藤井俊博(二〇一三a)『今昔物語集の「にけり」——テキスト機能の諸相——』(『表現研究』98)  
藤井俊博(二〇一三b)『古本説話集の「けり」のテキスト機能——「にけり」「係り結び」の終結機能——』(『同志社国文学』78)  
藤井俊博(二〇一四a)『発心集の「けり」のテキスト機能——係り結びの使い分け——』(『同志社国文学』81)  
藤井俊博(二〇一四b)『沙石集の「けり」のテキスト機能——梓づけ表現の多様化——』(『人文学』同志社大学)194  
藤井俊博(二〇一五)『覚一本平家物語の「き」「けり」のテキスト機能——梓づけ表現と係り結び——』(『国語と国文学』第92巻12月号)